総説

第一章　序言

昭和三六年一月二四日、平城宮跡中央北部で実施中の第五次調査地域の一土壙から、はじめて木簡を発見した。この予期しなかった発見以後、調査地域が拡大するとともに、木簡の出土点数も増加し、昭和四三年一〇月末では、ほぼ二万点になった。

平城宮出土の木簡は、これまであまり注意されなかったごく少数の発掘または伝世品があったとはいえ、日本において多量に出土した最初の例である。この木簡の示すような木札に文字を書き、事務処理に用いたことやその豊かな記載内容は、これまで想像もできなかったところである。これらは、数少ない奈良時代の文献史料を補うものであり、その研究は奈良時代研究において不可欠のものになりつつある。

奈良国立文化財研究所による平城宮跡の発掘調査は、予備的な昭和三〇年の第一次調査の後、昭和三四年に本格的な調査が開始されてから、満十年にならんとし、その調査成果は『平城宮発掘調査報告』（奈良国立文化財研究

所学報)として、Ⅰ～Ⅳの四冊をすでに公刊している。木簡はそのⅡとⅣに報告該当地域出土のものについて述べたが、今回から木簡を集成した図版を中心にした報告書を作成し、その第一冊として本書を刊行することにした。

この『平城宮木簡一』には、発掘調査開始以来昭和三八年度第一三次発掘調査までに出土した木簡をすべて収録した。最初に木簡が出土したのは、昭和三五年度に宮域内北部中央付近の宮内省大膳職と推定した官衙遺跡のある地域で行なった第五次発掘調査においてであって、天平宝字末年頃に塵芥を処理するためにうがち、埋没した土壙内から四〇点を発見した。ついで、同じく大膳職推定地域内で行なった昭和三七年度第七次発掘調査において、大型の井戸の中から二点の木簡を発見した。さらに昭和三八年に第二次内裏北部外郭内で実施した第一三次発掘調査のとき、二個所の土壙から木簡が出土した。SK八二〇とよぶ土壙は、天平末年頃に埋められたと推定している塵芥処理用のもので、一八四三点の木簡が多量の土器・瓦・木製品とともに出土している。SK八七〇土壙は、ほぼ天平宝字末年頃に埋没したと推定できるもので、四〇点の木簡があった。ここに収めた木簡は、以上四個所の遺構から出土した一九二五点である。

ここに収録した木簡の発掘整理には、平城宮跡発掘調査部員全員があたり、報告書の執筆作成は主として、坪井清足・守田公夫・田中稔・田中琢・狩野久・原秀三郎・横田拓実・工楽善通・鬼頭清明・加藤優・岩本次郎などがおこない、写真撮影には、渡辺衆芳・八幡扶桑・佃幹雄・杉本敏昭があたった。